

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	杉山由里子
論文題目	ブッシュにもつれる生と死 —サンの過去・現在・未来の構築—		
(論文内容の要旨)			
<p>本研究は、ボツワナのカラハリ砂漠及びオカバンゴデルタ周辺で狩猟採集を続けてきたサンが、再定住政策や牧畜民ツワナの文化を基盤とした社会変容の中で自分たちの死、これまでそしてこれからの生き方とどのように向き合っているのかを明らかにしたものである。</p> <p>第Ⅰ部では、現在のサンの葬儀と埋葬の実践を分析することで、再定住地での新しい生き方に対処しかつツワナ式の葬式や生活が新しい慣習として広がりつつある様子を明らかにした。遊動時代のサンの埋葬は断片的に描かれ、特に、埋葬後に居住地を放棄すること、また故人を簡素に埋葬することは、サンの生活の特徴である平等社会を示す行為として取り上げられた。しかし、現在のサンは、開発計画によって設けられた再定住地に墓地を持ち、かつお金をかけて故人を埋葬する。これは、再定住地における(1) 社会集団の構造、(2) 経済格差の問題に対処するためである。再定住地ではキャンプが崩壊し、社会集団形成の基盤が失われた。その結果、人々は話し合いによって埋葬場所を選択することで、再定住地での親族関係や人間関係を再編成していた。これを通じて明確化される新たな社会集団は、近年拡大した経済格差と深く結びついている。平等社会と言われてきたサンが、ツワナ式の葬儀こそ望ましい埋葬とすることで、新しい土地でのあるべき生活を試みているのである。</p> <p>第Ⅱ部では、再定住地においてツワナの葬儀が一見広く受け入れられているように見える一方で、サンの人々が個人的には今の生き方や死に方に納得していない様子、その記憶と感情を共有する「私たち」として繋がりつつあることを明らかにした。サンは、遊動時代にはブッシュでの経験を基に自然の中で生じた異質さを感じ取り、人の死の発生と重ねて理解していた。一方、現在では彼らがブッシュでは経験したことのない再定住地での死に方の異質さが顕著となっていた。公的な空間とみなされ適切な行為が求められるツワナ式の葬儀において、それにそぐわない行為や発言がサンの葬儀では多く見られる。大切な仲間を失ったことがかつての生き方と死に方を失ったことと繋がり、サンを開発計画の恩恵を受けた「国民」にしようとするボツワナ国家の政策とは異なる形で、サンとしての集合的なアイデンティティが形成されつつあるのである。</p> <p>第Ⅲ部では、他民族との交流による弔い、特に死後の世界観の再編について考察した。遊動時代は、埋葬後の居住地の移動／歩みによって死から時間的・空間的な距離を取っていた。サンの中でもブガクウェの生活域は水が豊富な生産性の高い土地で</p>			

あったため、他民族の流入や感染症の蔓延、また政府の土地開発に巻き込まれながら生きてきた。こうした環境下で進んだ定住化の過程をブガクウェの語りから再構成し、人々が新しい埋葬実践（薬）を取り入れていった様子を描いた。原野での経験と深く結びついた想像世界で死の発生を理解していたブガクウェにとって、薬の導入は、死者が絶対的存在となる想像世界での死の理解へと変化していった。また、個別に記憶されていた死者が、集団的で抽象的なものに変化したことで、「死者」についての感情のイメージは、サンが1) どのように生きるべきかという社会的規範や未来を共有すること、及び2) どのように生きてきたかという感情や過去を共有することにも利用されるようになっていた。

以上から本研究では、サンが一見するとツワナ式の葬送儀礼を導入することで国民としての統合政策を受け入れているように見える一方で、そうした実践に伴って個人的なわだかまりの感情が表出し、それを共有することで集合的な感情が醸成され、サンとしてのアイデンティティが創造されつつある様子、その過程で死者についての感情のイメージが利用される様子を明らかにした。